

5月14日まで

国立アイヌ民族博物館 第4回テーマ展示 地域からみたアイヌ文化展 「アカント ウン コタン ～阿寒湖畔のアイヌ文化」



阿寒湖畔では、アイヌ文化の伝統が観光業に携わる人々の間で受け継がれ、発展してきました。伝統を正しく受け継ぐとともに新しいものを生み出してきた阿寒湖畔のアイヌ文化を、「歴史」「工芸」「芸能」「共に歩む人たち」「ことば」「観光」の全6章で紹介しています。

阿寒湖畔の創り手たちや名匠たちの工芸作品、人形劇などの新しい取り組み、同地方のアイヌ文化の伝承に取り組んだ山本多助エカシの自筆ノートや木彫など計141点と見どころ満載の展示です。「地域からみたアイヌ文化展」の第2回目としての位置付けです。

詳細は、アイヌ民族文化財団（☎0144-82-3914）か右二次元コードから。



来館者の質問に答え解説する山崎さん
(右から2人目)

仙台藩白老元陣屋資料館企画展

町伝統文化継承者「山崎シマ子・菅野節子 二人展」

～紡がれた技、アイヌの伝統的手工芸～

2人の伝統文化継承者認定を記念し、3月11日から31日まで開催しました。2人によるアットウシ（樹皮衣）やゴザ編み、縫製、文様刺しゅうなど45点を展示。町内外から訪れた来館者らは、「刺しゅうだけにとどまらないさまざまな手仕事を見てほしい」（山崎さん）と話していた通り、オヒョウニレの内皮で織った衣や、アットウシ織りのバッグ・袋、首飾り、春夏秋冬シリーズのタペストリー（壁飾り）など受け継がれた伝統作品に興味深げに見入っていました。

知っておこう アイヌ文化

マカヨ

イランカラフテ。雪が溶け、枯れ草の隙間からフキノトウが顔を出しているのを見ると、春の到来を感じます。やがて、フキノトウの周囲には、地下茎で繋がったフキの葉が姿を現し、山菜の季節が本格化していきます。

さて、フキノトウと言いますと、天ぶら、汁の実、フキ味噌などの料理を思い浮かべる方も多いのではないのでしょうか？アイヌ民族もフキノトウをマカヨ（地域によって様々な呼び名がある）と呼び、皮をむいて生のまま、あるいは焼いて食べた他、汁物の具材に利用するなどしていました。

筆者はマカヨと聞くと、故郷である白糠町の川の名前を思い出します。フキノトウを刈る沢を意味するマカヨ・タ・ナイから名付けられたマカヨ川周辺には、春、フキノトウや様々な山菜が密生します。

また、アイヌ民族に伝わる言い伝えの中にもマカヨは登場します。例えば、人間に生活の仕方を教えたカムイであるオイナカムイの妹（女神）が、アイヌモシリ（人間の世界）のあまりの美しさに嬉しくなり、踊りを舞い続けたことで荒廃させてしまった罰として、小さなマカヨの姿になり、さみしく暮らしたという話が残されています。

このように、マカヨはアイヌ民族の暮らしに密接に関係していることがわかります。

政策推進課 アイヌ政策推進室 学芸員 森洋輔



マカヨはマカオやパッカイなどとも呼ばれる

問い合わせ先：イオル事務所 チキサニ ☎82-6301